

アイヌ生活文化再現マニュアル

イタオマチプ  
「板綴り舟」  
綴る



アイヌ生活文化再現マニュアル

# 綴る

イタオマチプ  
【板綴り舟】

## 発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及と啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

## 目 次

発刊にあたって

イタオマチブ（板綴り舟）とは

イタオマチブの制作

各部の名称	4
各部の材料	6
〈舟敷 <sup>ふなしき</sup> 〉	7
〈目止め・舟敷完成〉	15
〈とも板・おもて板・目塞ぎの木〉	17
おもて板・とも板	18
目塞ぎの木	21
綴る	23
おもて板・とも板を綴る	24
〈あばら木 <sup>はねいた</sup> ・羽板〉	26
あばら木	26
羽板	28
羽板の二段目を綴る	33
〈貫木 <sup>かんぬき</sup> ・帆柱・踏み板〉	41
貫木	41
帆柱	42
踏み板	44
〈座り板・櫂・櫂受け〉	45
座り板	45
櫂・櫂受け	45
車櫂〔カンジ〕	45

櫂受け .....	46
練り櫂 <sup>ね がい</sup> .....	48
練り櫂用の櫂受け .....	50
〈飾り板・飾り木鈴・帆〉 .....	52
飾り板 .....	52
飾り木鈴 [トゥムシ] .....	53
帆 .....	53
〈帆柱設置・飾り付け〉 .....	54
帆柱設置 .....	54
飾り付け .....	56
帆をつける .....	56
〈完成〉 .....	57

## 参考文献

イタオマチプを展示・収蔵している施設

※ [ ] 内はアイヌ語片仮名標記です。

## イタオマチプ（板綴り舟）とは

狩猟、漁撈、採集民族であるアイヌは海を渡る交易の民でもあり、漁や交通、運搬の手段として舟を使ってきた歴史があります。アイヌの舟として一般的に知られているのは、河川や湖沼で使われた丸木舟〔チプ〕です。海で使用していた舟は「イタオマチプ」と呼ばれ、海はもちろん大きな河川でも、かなり上流まで遡ることのできる海と河川両用の舟でした。かつてアイヌは「イタオマチプ」で海に乗り出し漁撈、交易の生活をしていました。

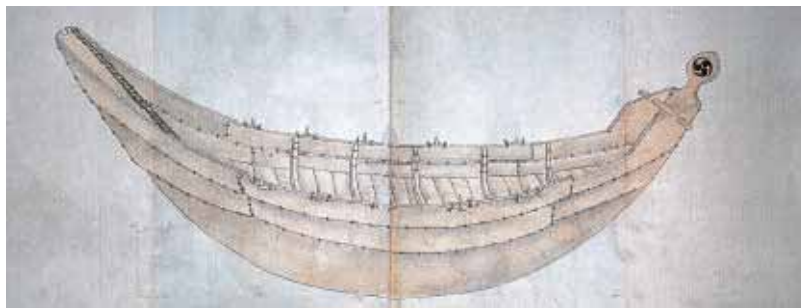


イタオマチプ

「イタオマチプ」は舟敷<sup>ふなしき</sup>といわれる丸木舟の上に、波を避けるための羽板<sup>はねいた</sup>を縄で綴じた「板綴り舟<sup>いたつづり</sup>」です。それはアイヌ独特の技術で造られていました。



舟敷の図



舟敷に板が綴られた図

現在「イタオマチブ」は完全な形では残されていませんが、資料館や江戸時代に記録された絵画など古文書の中で見るすることができます。丸木舟の上に板を綴り合わせて容積を大きくした「イタオマチブ」は、櫂と帆を使って航行しました。

丸木舟を土台として、板を綴るというアイヌ独特の技術で造られ、車櫂を使う「イタオマチブ」は、和人にも強い影響を与えました。和人がアイヌの舟を模倣した舟を作っています。東北地方の「モジブ [モチブ=アイヌ語で小さい舟の意]」にその姿を見ることができます。



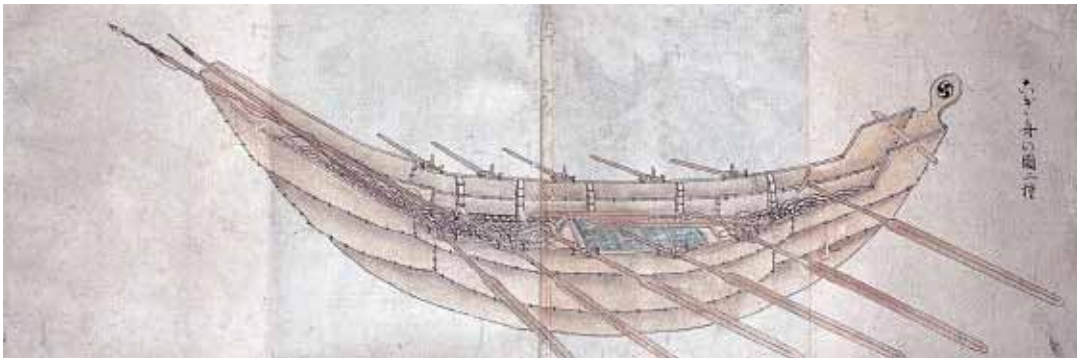
帆の図



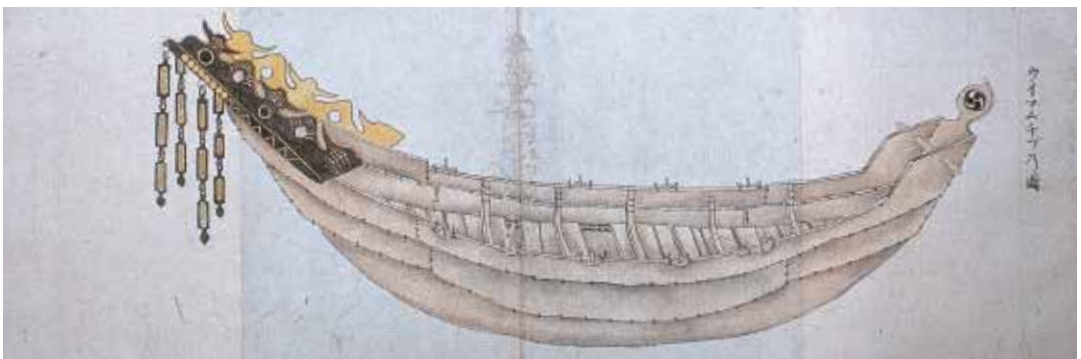
車櫂の図



綴り櫂の図



櫂がつけられた舟の図



飾りつけされた舟の図

写真は「蝦夷鳴図説」より抜粋

# イタオマチブの制作



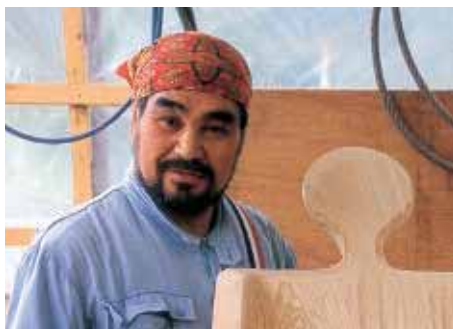
イタオマチブ

再現する「板綴り舟・イタオマチブ」は全長13.5m、巾1.3m、10本の<sup>くるまがい</sup>車權と1本の<sup>ねがい</sup>練り權そしてガマの茎や葉で編んだ帆が動力となる外洋船です。



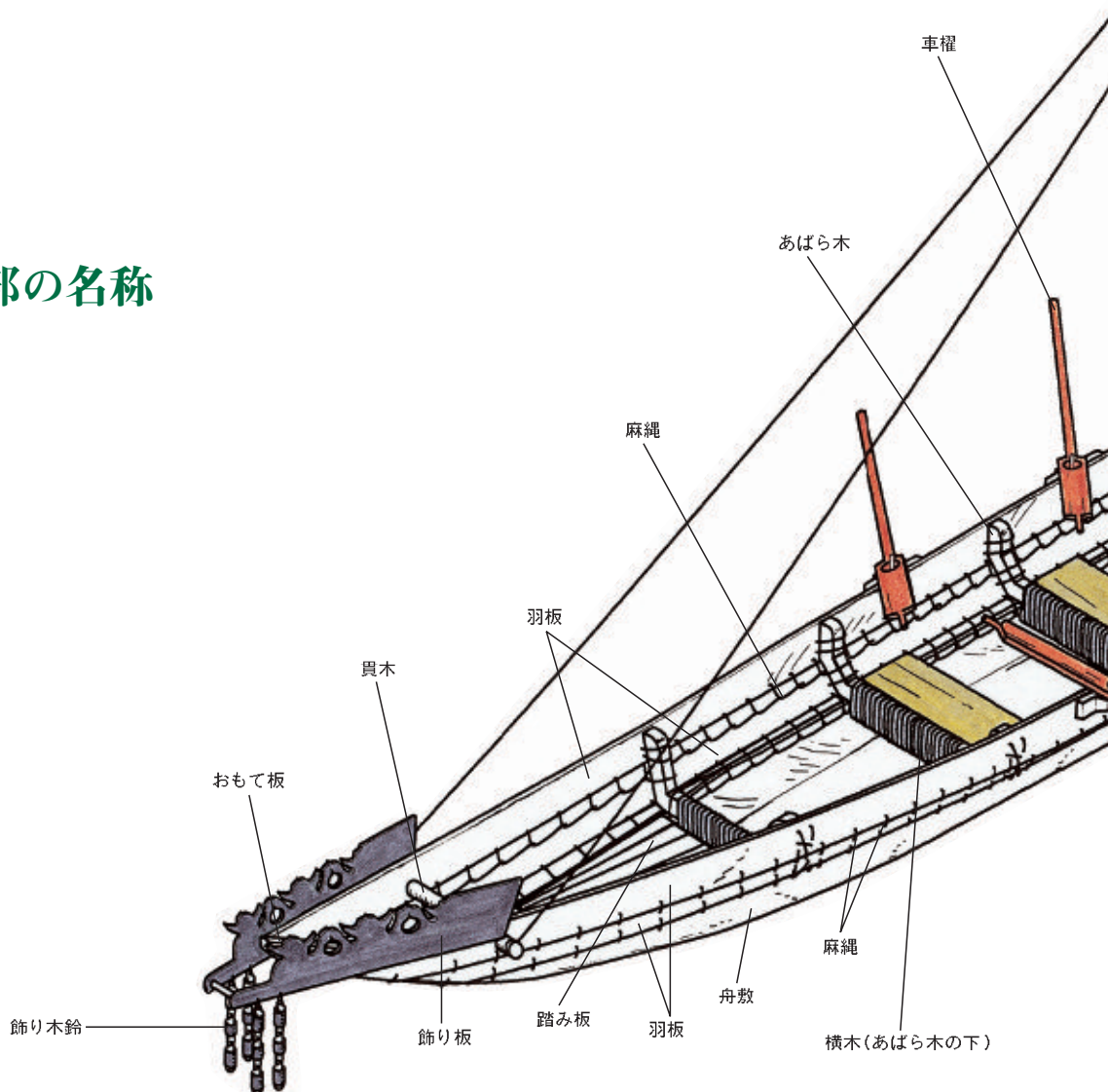
現在、「イタオマチブ」の製造技術は伝承されていませんが、文献やアイヌの伝承を基に現代の技術も用いて制作します。

ここで紹介する「イタオマチブ」は、北海道釧路市に住む秋辺得平さんが再現したものです。



秋辺得平さん

## 各部の名称



舟造りの作業に入る前に作業の安全と良き舟ができるよう火の神を通して様々な神々に祈ります。  
(写真5)



写真5

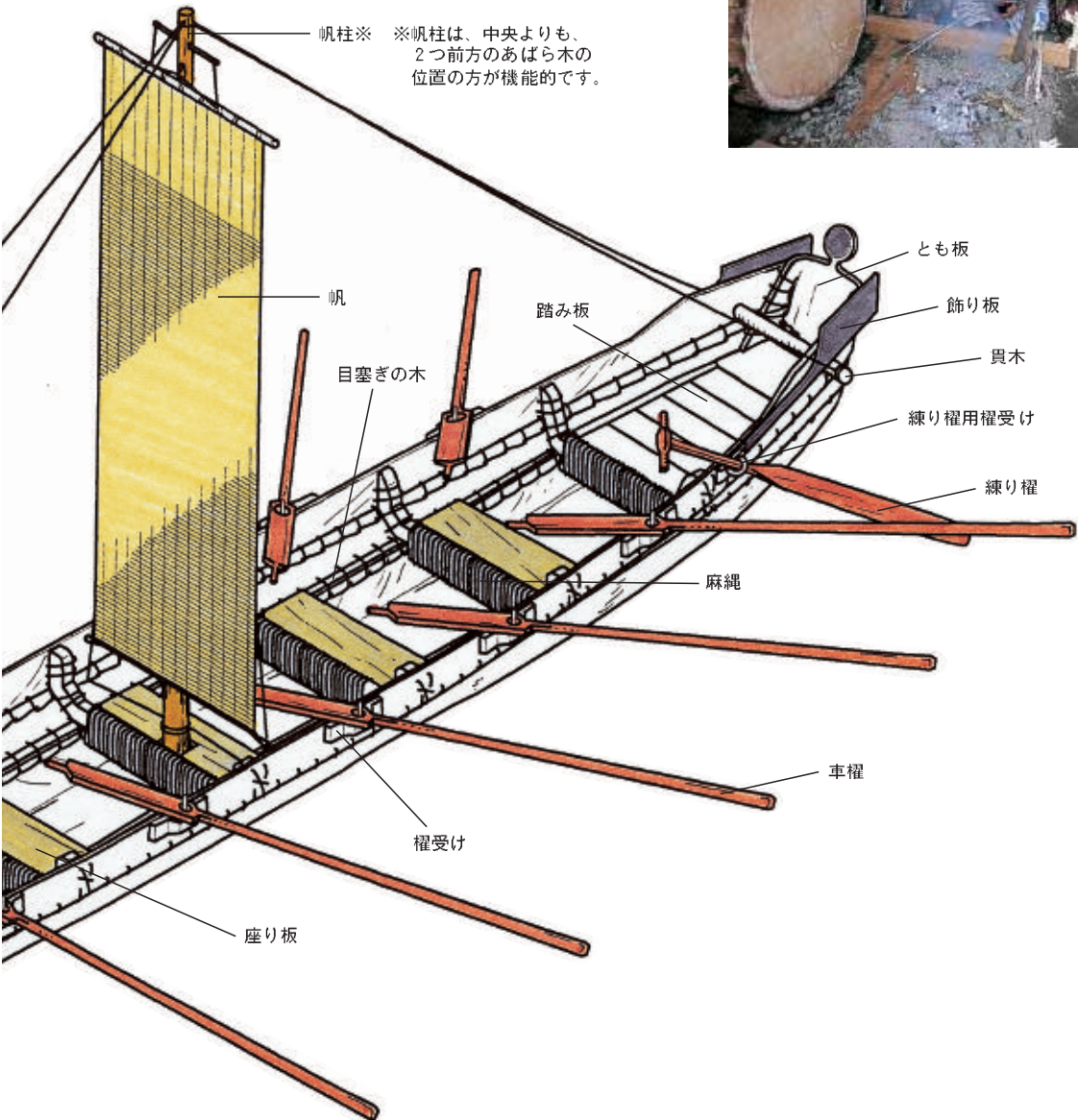


図1

## 各部の材料

- 舟 敷 : センノキ 直径約1m※ 長さ14m ※根元側樹皮を剥がす前
- おもて板 : センノキ (舟敷の原木より)
- とも板 : センノキ (舟敷の原木より)
- 横 木 : エゾマツ
- 目塞ぎ棒 : トドマツ (板:トドマツ)
- あばら木 : センノキ (ドスナラ又はイタヤカエデが良い)
- 羽 板 : エゾマツ
- 帆 柱 : カラマツ (トドマツも良い)
- 貫 木 : オンコ
- 座り板 : エゾマツ
- 車 櫂 : シウリザクラ
- 練り櫂 : シウリザクラ
- 櫂受け : ドスナラ
- 櫂受け軸 : ツリバナ (エリマキノキ)
- 飾り板 : センノキ (舟敷の原木より)
- 飾り木鈴 : オンコ
  - 縄 : 麻縄 直径12mm (長さ約200m分)、直径9mmの2種
  - 帆 : ガマ、木綿布、綿糸、竹
- その他 : 竹 (竹釘用)、木ねじ、木工用接着剤、割れ止め材、目止材、オイルステイン、木綿の紐、耐水性塗料、木工用道具

## ふなしき 〈舟敷〉

イタオマチブの土台となる舟敷〔イタシャキチブ〕・丸木舟を造る原木です。樹齢300年を超えるセンノキで長さ約14m、直径は約1mあります。(写真6、7)

舟敷の材料に良いとされているのは、太くて素性が良く枝の少ないカツラ、センノキ、オオバヤナギなどです。

舟は樹木の北に向いている面を底に造ります。これは北側の方が、年輪が詰まり、丈夫で重く、水に浮かべた時に安定感が得られるからです。

場所によっては厚さ5cmになるセンノキの樹皮を白い木の肌が見えるところまで剥がします。(写真8、9)



根元側より 写真6



梢側より 写真7



写真8



写真9

舟敷の制作では、まず材料から舟の中心を割り出します。中心線を引いてみると船首側（根元側）が曲っていました。（写真10）



写真10

舟敷の中は原木の中です。突出している部分を切り落とします。（写真11）



写真11

「イタオマチブ」が造られたのは、鉄器が普及し斧などの道具が使われた時代と考えられています。

今回、切り落とした部分は、船尾に取り付ける「とも板」の材料にします。

「とも板」は必ずしも、とも木を用いなくてもかまいません。

（写真12）



写真12

舟の中が決まると舟底を削ります。原木は底になる側を上にしてあります。

舟底の面を割り出す方法は、まず年輪の中心から上の部分を8等分します。上から三つめ、8分の3のところが舟の底面になります。

船首、船尾側とも割り出しておきます。（写真13）



写真13

舟の底を削り出します。この底の面が舟の水平を決めるとともに、舟全体を形作っていくときの基準になります。(写真14、15)



船底を切り出す様子 写真14



写真15

原木の根元側が船首になります。これは波の衝撃を受けるには幅のあるほうが安定するからです。

船首・船尾の形をつくります。船首・船尾とも端に行くに従い細くしていきます。側面の角も落して、舟底全体を滑らかな面にします。

船首・船尾の端は平らに削ります。船体の中心部の舟底は平らにします。(写真16、17)



写真16



船首より望む 写真17

舟材の上下を入れ替え、舟の上側を削ります。船首・船尾は反るように斜めに欠き取ります。

中間部は薄く板状に切り舟の他の部品「座り板〔ウムシャムイタ〕」として使います。

これらの部品は、とも木でなくてもかまいません。(写真18)



写真18

水を被りやすい船首、船尾は上に反り上がった形になりました。(写真19、20)



船首側より 写真19



船尾側より 写真20

現代の工具を使い中を削り貫きます。初めは船べりの厚みを多く残し、中をブロック状に切り込みを入れます。(写真21、22)



写真21



写真22

かつて舟の中を削り抜くのは斧などでした。さらに古く、鉄器が使われる以前では、石器で掘りやすくするために削る面を焼きました。

削ったあとに水を満たし、そこに焼き石を入れ、お湯にして木を軟らかくさせてから舟の幅を拡げました。

木のブロックを鑿で、鋸の痕がなくなるまで削り取ります。(写真23)



写真23

初めは仕上がりの船べり、舟底よりも厚みを多くとっています。(写真24)



写真24

粗削りした丸木舟になりました。これからは、木を割らないように気をつけながら、数回に分けてさらに薄く削っていきます。(写真25、26)



写真25



写真26

舟の外側は、水の抵抗が少なくなるように、原木の起伏を削ってならします。

船首・船尾の内側は厚みを残し傾斜のある平らな面を作ります。(写真27)



船首側 写真27

底や船べりの厚さを確認しながら段階的に慎重に削ります。(写真28、29)



写真28



写真29

ある程度まで削った後、左右の側面の高さを揃えます。

舟底の水平を合わせて、船体に水を入れます。水を入れることで水洩れのある箇所が、わかります。(写真30)

船首部の外側の右側が窪んでいたため左右対象になるように木で埋めています。



写真30

油性の染料を浮かせて船べりの内側に基準となる印を付けます。(写真31、32)



写真31



写真32

水を抜くと基準となる印が残ります。(写真33、34)



写真33



写真34

水面を利用して印した水平の線に合わせて削り、左右の高さを揃えます。(写真35)



写真35

船べりの高さが決まったところで内側をさらに削り、薄く軽くしていきます。(写真36、37)



写真36



写真37

予定の厚さになったところで、丸木舟全体にやすりがけをします。アイヌはやすりがけにトクサと呼ばれる植物を乾燥させて使っていました。(写真38、39)



写真38



写真39

## 〈目止め・舟敷完成〉

浸水を防ぐために樹脂性の目止め材を塗ります。  
(写真40)

古くは目止めに、焼いたり木で擦り合わせた後、  
クルミの油などを塗っていました。



写真40

全体を目止めするとイタオマチブの土台となる舟敷〔イタシャキチブ〕の出来上がりです。  
(写真41、42、43、44)



船尾より 写真41



船首より 写真42



写真43



写真44

全長12.6m、幅は約90cm。船体中央部の船べりの高さおよそ30cm。船首と船尾が反り上がった形です。舟底の厚さは7～8cm、舟の側面の厚さは上部で2～3cm。意外に薄く軽い船体です。

舟べりや船首、船尾に原木の凸凹の形を留めています。(写真45)



写真45

原木から舟敷になるまでの模式図 (図2)

①樹皮を剥いだ原木に舟底の印をつける。

②突出している部分を切り落とし、舟底を削り出す。

③舟底の形に削る。

④上下を入れかえて舟の上側を削る。

⑤中を削り貫き、凹部に木を埋める。

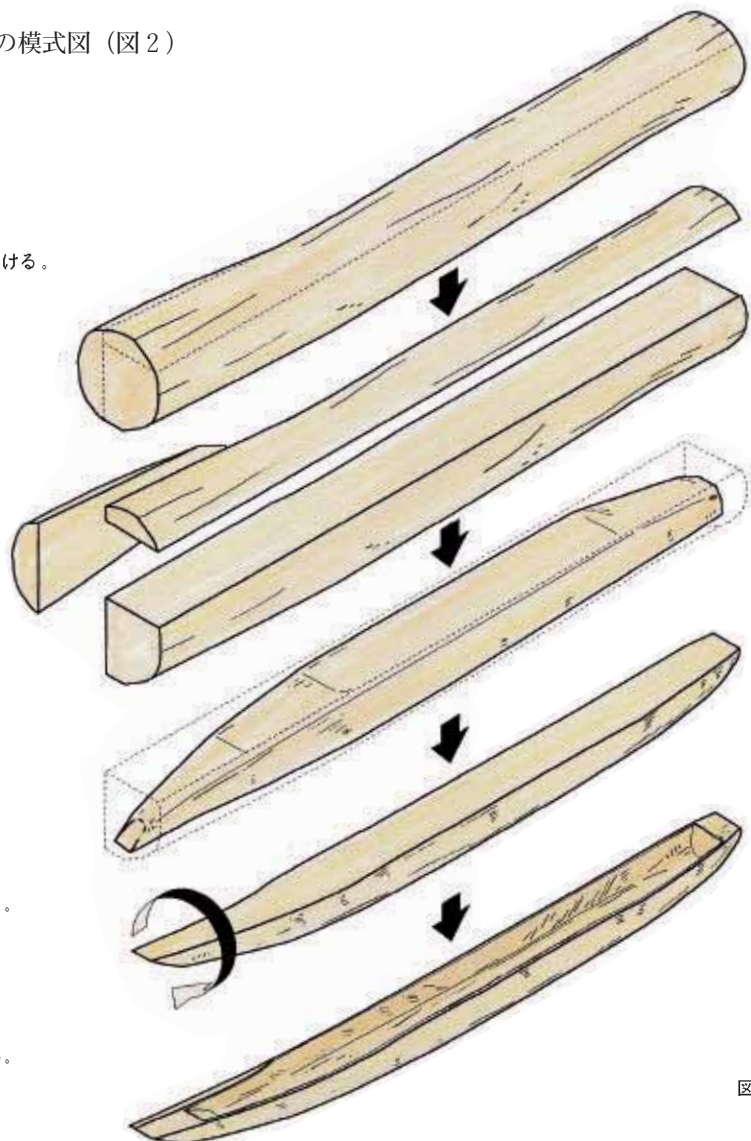


図2

## 〈とも板・おもて板・目塞ぎの木〉

はらいた  
羽板を取り付ける準備です。

舟敷の内側にエゾマツの横木を7本取り付けます。角材の横木は、舟敷の補強と羽板を張るときに使う部品を取り付けるためのものです。横木は舟敷の中を拡げるためにも使います。今回は船体の巾が十分にあるので拡げていません。(写真46)



写真46

横木の固定には釘のための穴を開け、その中に竹釘を打ち込みます。竹釘には切り込みを入れ、抜けないようにします。舟造りには古くから木釘などが使われていました。横木は船べりの上から1 cmほど出ています。(写真47、48、図3)



写真47



写真48

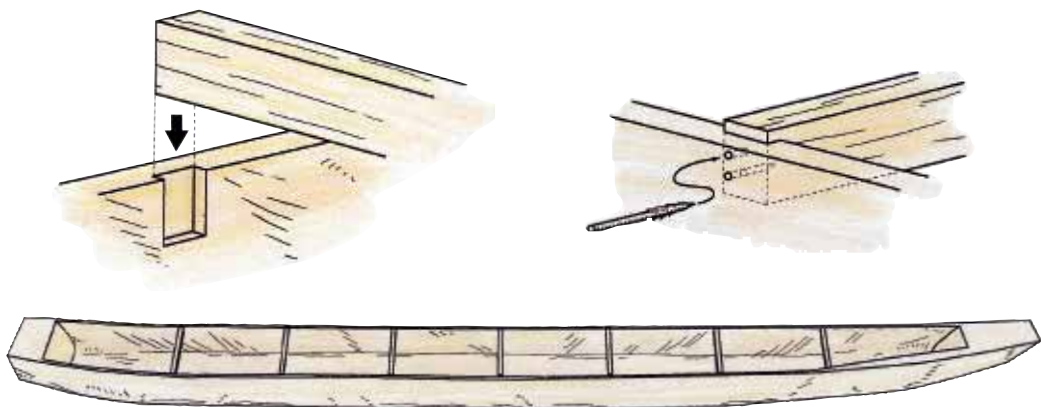


図3

## おもて板・とも板

船首につける「おもて板〔ナムシャムイタ〕」と船尾で板を綴じるための部材「とも板〔ウムシャムイタ〕」をつくります。

「おもて板」の部材を舟の舳先の形に合わせます。  
(写真49)

材料には船体の丸太から切り取った部分を使いました。



写真49

「おもて板」の材料はセンノキで、軽くするため内側を削っています。(図4)

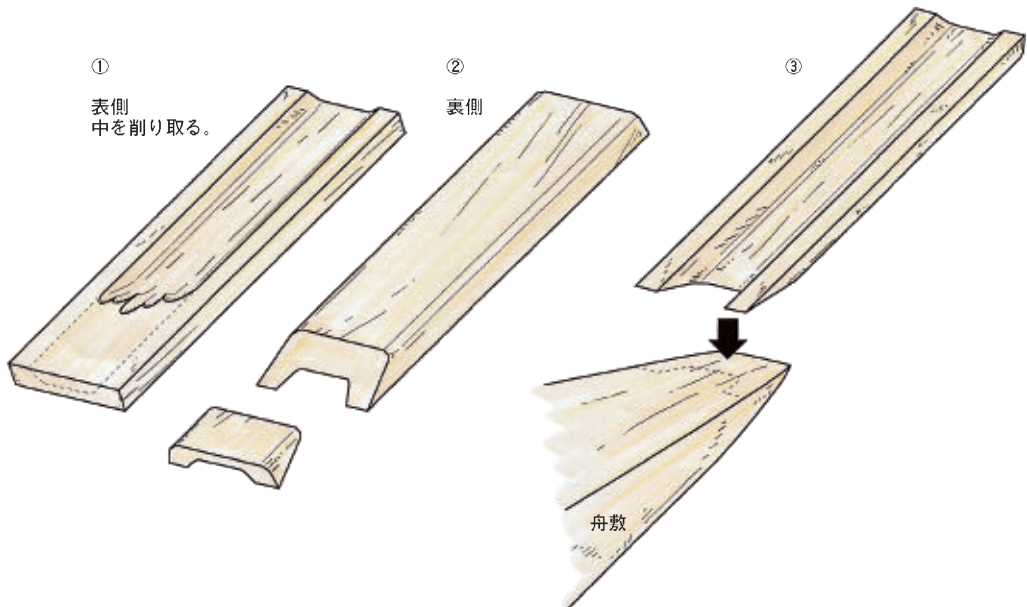


図4

「おもて板」を舳先に仮留めします。「おもて板」と舟敷〔イタシャキチブ〕を縄で綴るための穴を開けています。(写真50、51)



写真50



写真51

「とも板」は丸い頭の付いた、人間の上半身のようになっています。一枚の板を削り貫いてつくりました。(写真52、53、54)



写真52



とも板の前側 写真53



とも板の後側 写真54

丸い部分の前後に文様を彫ります。前側は、「後彫り」で文様をつけます。文様の範囲を決めて黒く塗ります。古くは、墨を塗るか、カバノキの樹皮を燃やして出るススを塗布していました。

絵の具が乾いた後、彫ります。黒い色と彫った後にできる木地の色で文様が浮かび上がります。

(写真55、56)



写真55



とも板前模様 写真56

とも板は前後で文様の彫り方が違います。後側は、先に線の文様を彫り、窪みに黒い絵の具を擦り込みます。絵の具を乾かした後で凸部の黒い絵の具を削り取り木の色を出して線の文様を浮き上がらせるのです。文様は作り手によって異なります。

(写真57、58)



写真57



とも板後模様 写真58

「とも板」を船尾に仮留めします。竹釘と接着剤を使っています。(写真59)



写真59

舟敷と「とも板」に縄を通す穴をそれぞれ5カ所開けました。(写真60)



写真60

## 目塞ぎの木

船べりの凸凹をなだらかに、そして舟本体が左右対象になるようにトドマツの板を取り付けます。ここも接着剤や竹釘を使って固定します。(写真61、62)



写真61



写真62

厚さ 1 cmの板を横木の段に合わせています。

(写真63)

板の中で調整して舟の形を左右対象にします。

(写真64)



写真63



写真64

板の下に補強と水洩れ防止のための「目塞ぎ棒〔ヒンラリップ〕」を取り付けます。(写真65)

目止め剤や充填剤を使って隙間を埋めていますが、古くは松脂やミズゴケを詰めて浸水を防ぎました。



写真65

断面が三角の「目塞ぎ棒」は舟敷と羽板との隙間を埋めるもので、それぞれの場所に合わせた幅のものを 사용합니다。(図5)

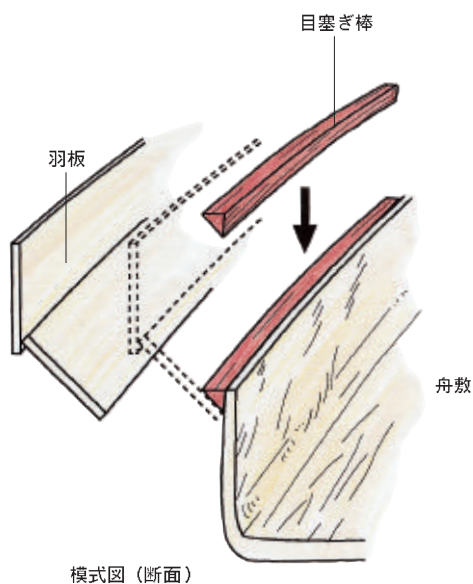


図5

## 綴る

船を綴るのは直径12mmの麻縄を 使 用 します。麻縄は水分を含むと縮む性質があり、水に浸かる舟の綴った部分をしっかりと締めます。古くはシナノキの樹皮の繊維を撚った縄を使っていました。

穴に通しやすいう縄の端を解いて間引きし、徐々に細くしてテープを巻きます。

縄の直径よりも小さい穴に麻縄を通して捩れを取り、毛羽立ちを押さえます。このようにして、穴を通して綴る時の抵抗を少なくします。

(写真66)



写真66

## おもて板・とも板を綴る

縄は長く使います。おもて板ととも板を綴ります。縄の中央に結び目を作り、舟の中心線に合わせておもて板を綴ります。縄を左右に分けて綴ります。

船尾も「とも板」を綴って固定し、縄を舟の左右へと分けておきます。「おもて板」、「とも板」を綴った後、左右から舟の中心に向かって羽板を綴っていきます。

「おもて板」の綴り方 (図6)

※右左で縄の色を変えています。

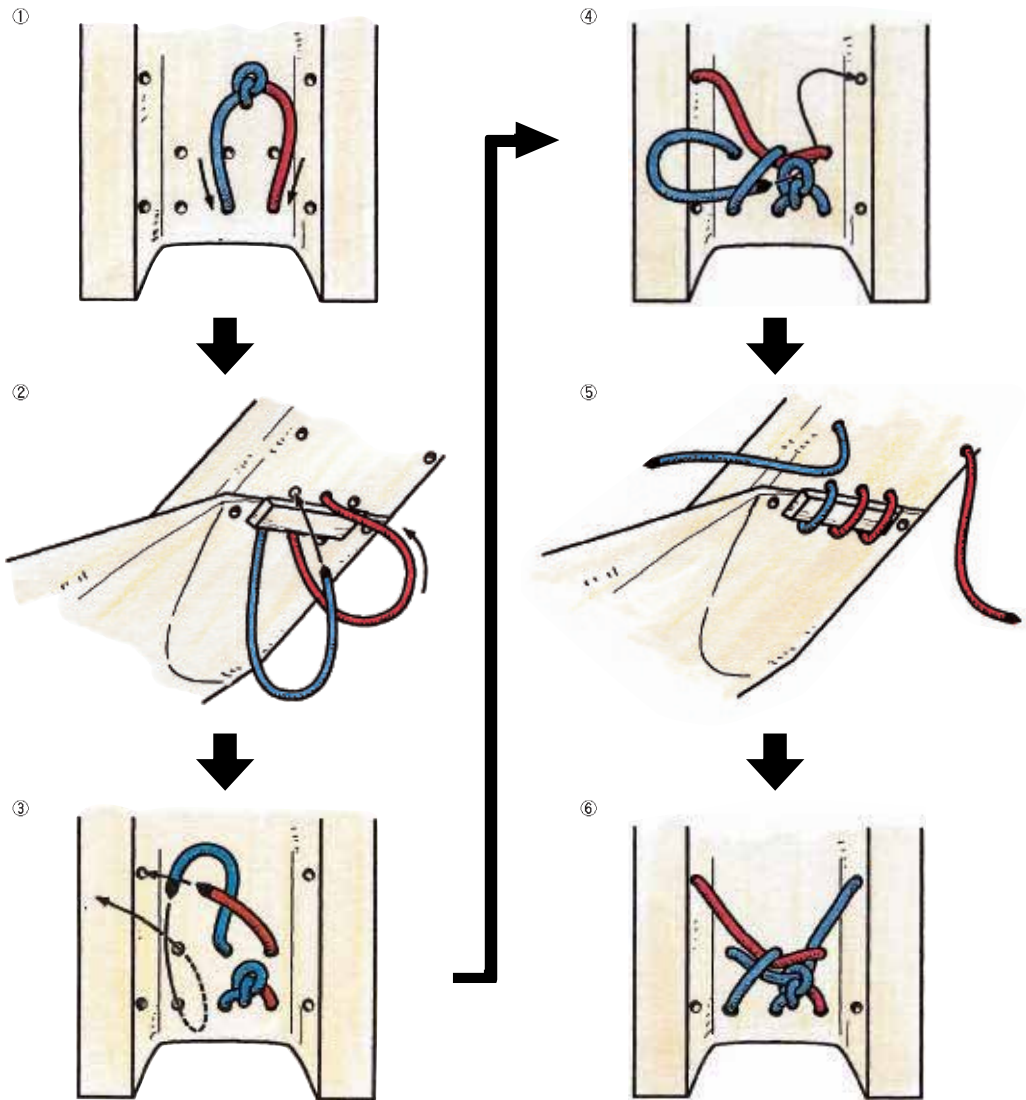


図6

縄を通す穴は浸水をふせぐため縄の直径よりも小さな穴です。縄を舟の内側から外側へ出して締め、内側へ戻しては締めるという作業を繰り返します。(写真67)



写真67

「とも板」の綴り方 (図7、写真68、69)

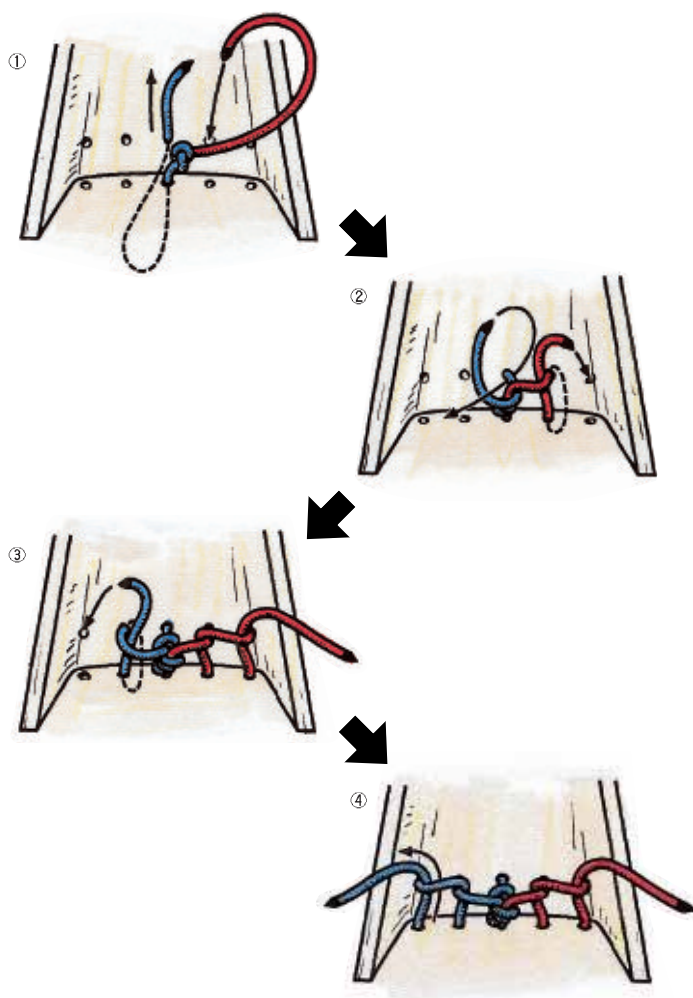


図7



写真68



写真69

## 〈あばら木・<sup>はねいた</sup>羽板〉

### あばら木

羽板を固定する部材「あばら木〔キウリ〕」を作ります。あばら木は7本の横木に取り付けます。横木の位置によって、長さや角度が違うので、それぞれの場所に合わせた形にします。

センノキの曲がりの部分を使い、取り付ける横木と同じ巾にします。(写真70)

あばら木には、堅いナラやイタヤカエデを使います。



写真70

左右に分けて一對ずつ作ります。写真は船首、船尾寄りの部分の「あばら木」です。(写真71)



写真71

船体中央部分の「あばら木」です。(写真72)



写真72

「あばら木」を取り付けます。竹釘で横木と仮止めした後、細めの麻縄を巻いて「あばら木」を固定します。(写真73)



写真73

「あばら木」の左右を固定します。(写真74)



写真74

縄の端の処理 (図8)

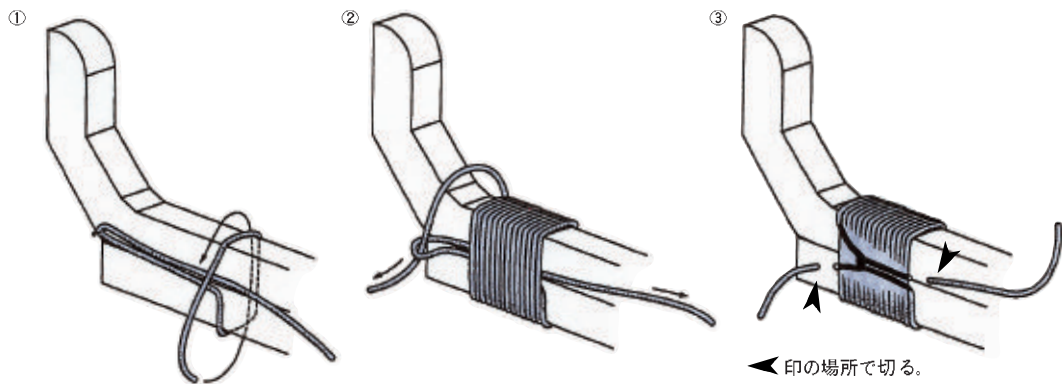


図8

## 羽板

波よけの板「羽板〔チプラプイタ〕」は上下二段取り付けます。素材はアカエゾマツです。

一段目の取り付けです。まず、おもて板と中央のあばら木、とも板の3カ所に羽板を合わせて仮留めします。(写真75)



写真75

舟敷と羽板は約5cm重ねて留めます。羽板と舟敷とを綴じる穴の間隔は上下で約7cm、左右15~20cmです。

穴に縄を通し、縫うようにします。

「イタオマチプ」の名の由来であるアイヌ独特の縄で綴る方法です。(写真76)



写真76

「おもて板」を綴じた縄を使って舟の中心部へ向けて綴っていきます。縄は下の内側の穴から外側へ出し、上の穴に戻します。(写真77)

綴じ方は羽板の二段目も同じです。



写真77

綴り方 (図9)

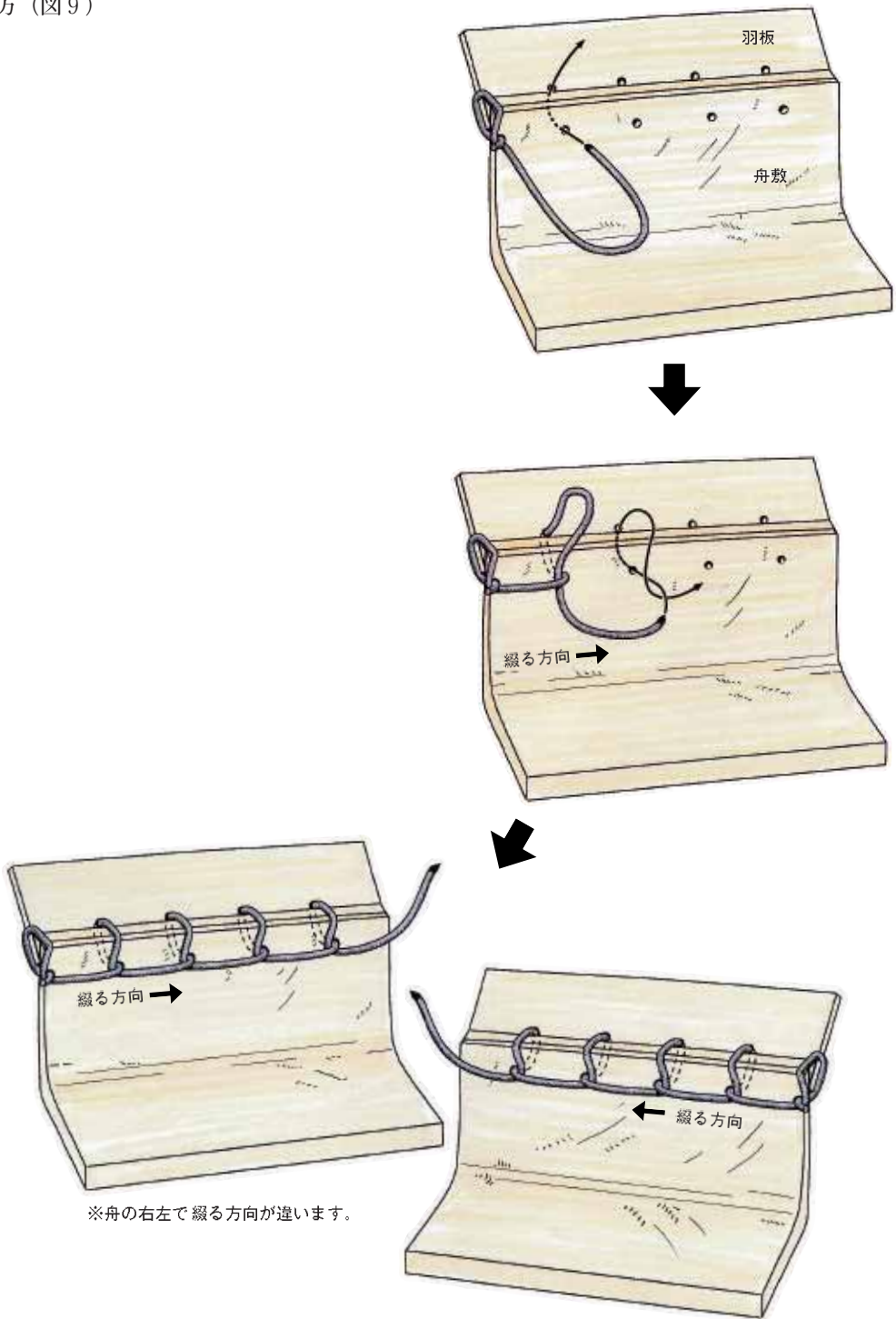


図9

綴るのは船首、船尾から中央へと進めます。船体の中央までは左右とも一本の縄で綴ります。表側は縦の綴り目になっています。(写真78、79、80、81)



船首内側 写真78



船首内側側面 写真79



船首外側 写真80



船首側面 写真81

二段目の羽板も仮留めします。おもて板の側面には、二段目の羽板との段差を埋める木を取り付けます。羽板と同じ厚さです。(写真82)

写真は、竹くぎを使って木を固定しているところです。

船尾のとも板も同じように段差を埋めます。



写真82

羽板の角度は、船首から船尾まで7カ所全て違ってきます。一段目の羽板の上に重ねて二段目の羽板をあて、その角度に合うように残りの6カ所のあばら木を加工して固定します。(写真83)



写真83

羽板は船尾に取り付ける板を除いて、一、二段とも同じ巾です。

羽板はおもて板側から、徐々にひねりを加えながら曲げます。

板の重なりを5 cmにして二段目の羽板を合わせます。舟の中央では垂直になっています。(写真84)



写真84

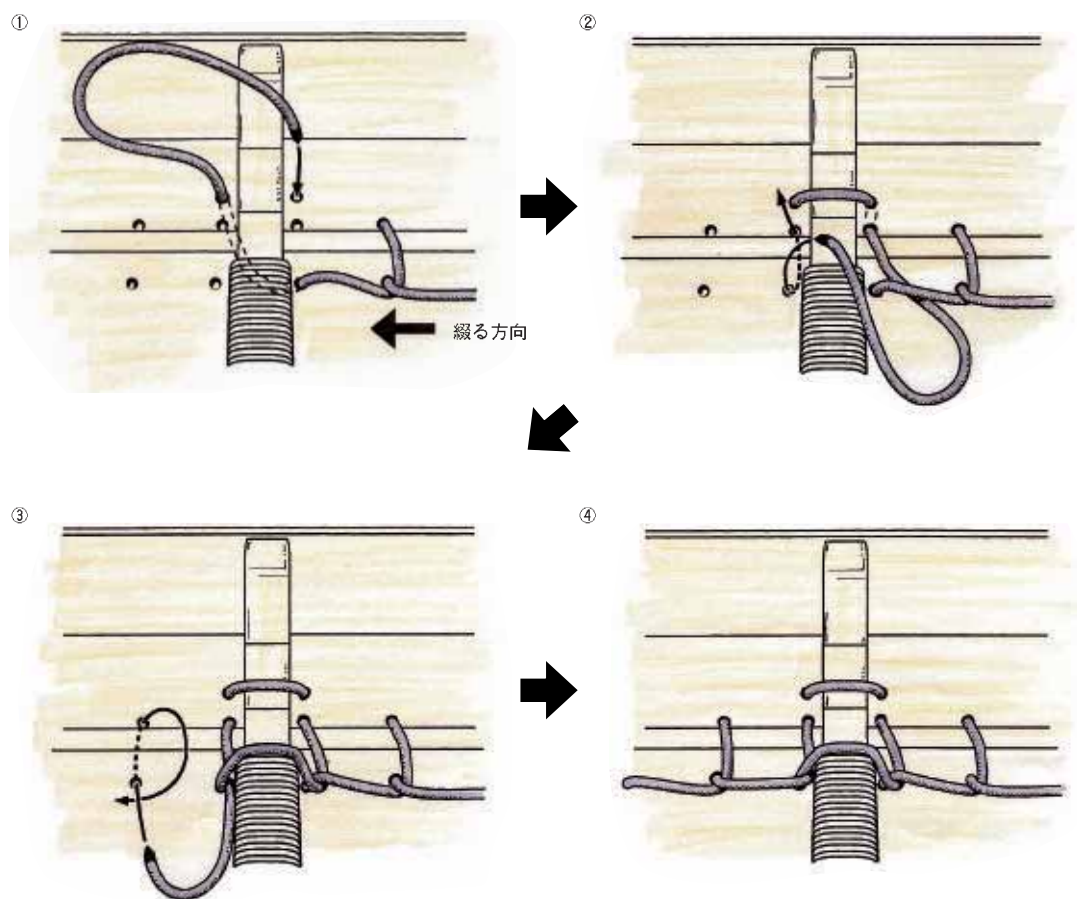
あばら木は、波に打たれた羽板が、内側に押されて割れるのを防ぐためのものです。

羽板を綴じてきた縄で羽板とあばら木を固定します。あばら木に沿って穴を開け、縄で巻くようにします。(写真85、図10)

あばら木と羽板とを固定することで舟全体の強度が増します。



写真85



羽板一段目の縄であばら木をとめる 図10

## 羽板の二段目を綴る

船首側では二段目の羽板をおもて板の端から綴じます。左右別々に綴ります。

一段目と二段目の板を縄で綴ります。  
(写真86、87、88)



写真86



写真87



写真88

船尾もとも板と羽板を船首側と同じように、綴じますが、羽板の端は裂けやすいので、当て木をして補強します。(写真89)



写真89

とも板と羽板の綴り方 (図11)

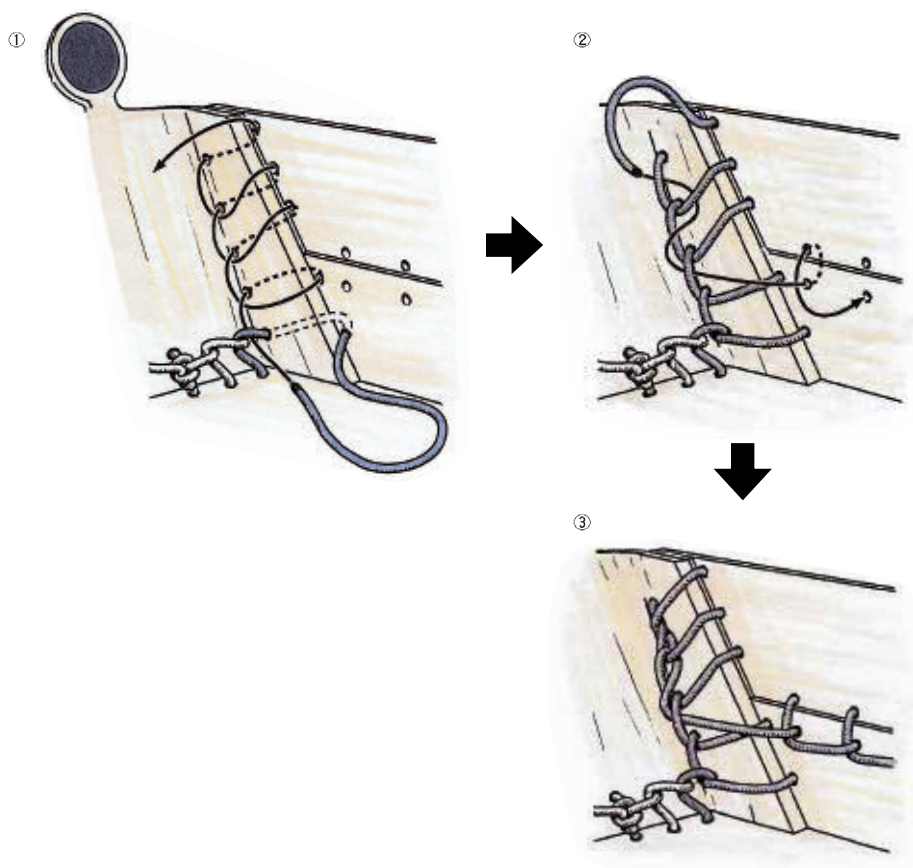


図11

船尾側の二段目の羽板には、とも板を綴った縄を使い、舟の中央に向かって綴ります。  
 (写真90、91)



写真90



写真91

あばら木と二段目の羽板の綴り方 (図12)

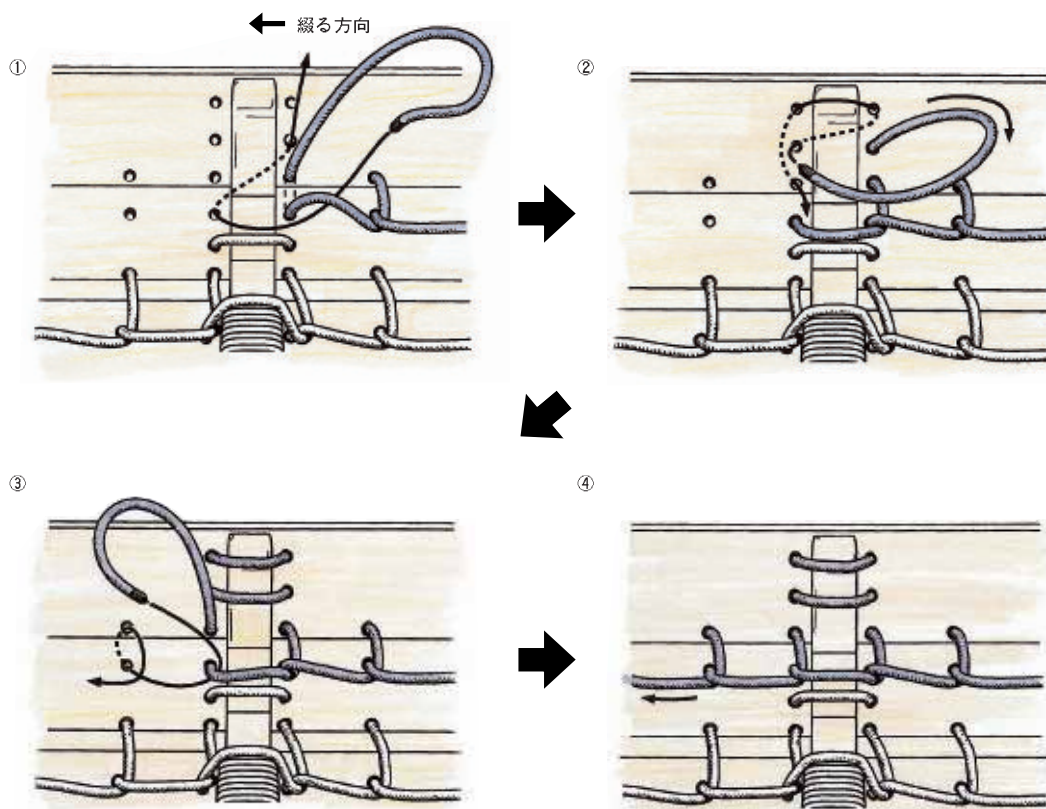


図12

綴られた様子（写真92、93、94、95）



内側 写真92



外側 写真93



写真94



写真95

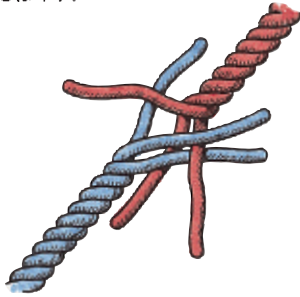
羽板を横につなぐときには、当て木でつなぎ目を内、外両側から挟んで仮止めして縄で綴じます。綴じ方はあばら木と同じです。(写真96)  
右側が処理された継ぎ目です。



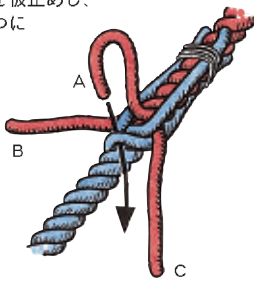
写真96

縄の継ぎ足し方 (図13、写真97)

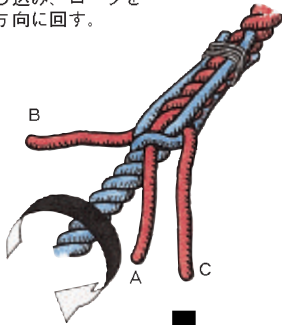
① ロープの端をほぐす。



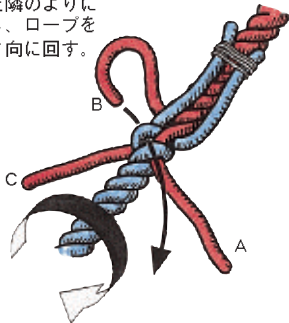
② 片側の3本を仮止めし、Aをよりの一つに差し込む。



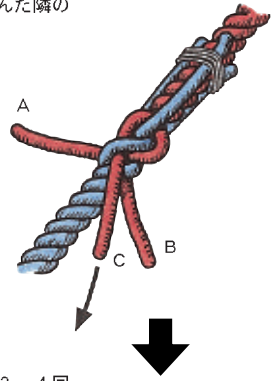
③ Aをたくし込み、ロープを少し矢印の方向に回す。



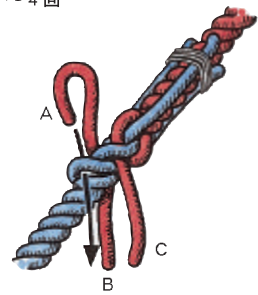
④ Aを通した隣のよりにBを差し込み、ロープを少し矢印の方向に回す。



⑤ CはBを差し込んだ隣のよりに差し込む。



⑥ 手順の③～⑥を3～4回繰り返す。



⑦ 余りをカットする。

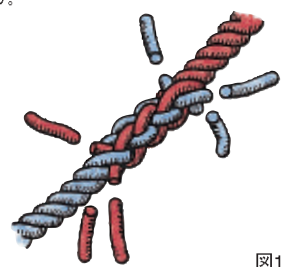


図13



写真97

イタオマチブは、舟敷に取り付ける材料の全てを縄で綴ります。(写真98、99)

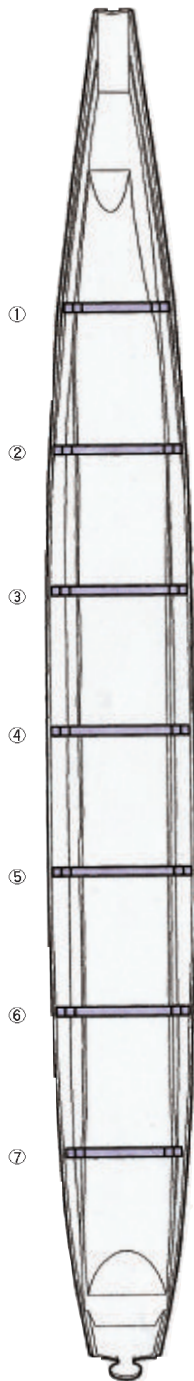


写真98



写真99

各部のあばら木



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



図14

船首、船尾から中央に向かって綴った縄は合せて200mに及びました。(写真107、108、109、110)



写真107



写真108



写真109



写真110

## かんぬき 〈貫木・帆柱・踏み板〉

### 貫木

帆柱を固定する縄を巻きとめるための貫木です。船首・船尾の羽板に直径10cmの穴を左右に開けてオンコの丸太を通します。船首側は外側に左右それぞれ約15cm出します。(写真111)



写真111

船尾では、左右に約20cmずつ出します。(写真112)



写真112

丸太の先には縄を巻くための溝をつけます。船尾側では2本の溝がつけられています。(写真113)



写真113

## 帆柱

帆柱にはカラマツを使いました。長さは5 m、根元側の直径は約13cmです。

取り外しのできる帆柱です。(写真114)



写真114

帆柱の底の断面を台形にします。これは、帆柱を立てるときに前後が判別できるようにするためです。

幅の広い方が前になります。(写真115)



写真115

帆柱の上の方には十文字になるように木を通します。帆柱の先端と十文字の下に穴を開けます。横に通した木の先にも穴を開けます。(写真116)



写真116

十字の下の穴に滑車を取り付けます。

中を削り貫いた筒状の木と軸になる細い棒を使います。(写真117)



写真117

この穴に筒状の木を入れ、軸になる細い棒を通します。これは帆を引き上げる時に使うもので、縄を巻き上げる際の抵抗を少なくするものです。  
(写真118、図15)



写真118

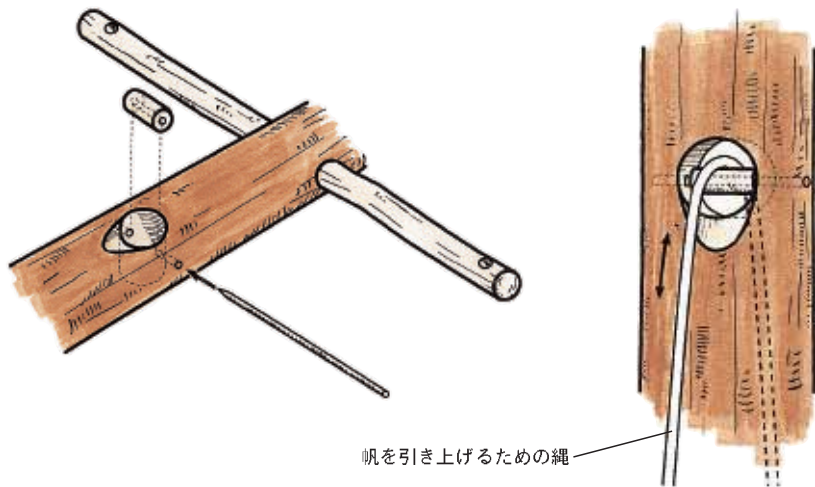


図15

帆柱は腐らないように全体に焼き目を入れます。  
(写真119)



写真119

## 踏み板

船首と船尾に踏み板を取り付けます。  
船首の内側には、横木を3本固定し、その上に板を敷きます。(写真120)



写真120

前後に板を渡して竹釘で止めます。(写真121)



写真121

この場所には船頭が立ち、漕いだり、舵をとったりするので、厚みのある丈夫な板を使います。下は物入れになっています。(写真122)



写真122

船尾は板を横に渡しました。半分に割った木で押さえて竹釘で止めます。(写真123)



写真123

## 〈座り板・櫂・櫂受け〉

### 座り板

漕ぎ手の座る場所に「座り板」を取り付けます。イタオマチブは手漕ぎのボートと同じく、漕ぎ手が進行方向に対し後向きで座ります。

座り板は両端以外の横木の後側に、5カ所5人分を取り付けます。板の位置を変更できるように麻縄で止めます。座り板をとめる縄は、羽板を綴っている縄に絡めます。(写真124)



写真124

### 櫂・櫂受け

イタオマチブの推進力は帆と、人が漕ぐ10本の車櫂、そして1本の練り櫂です。

### 車櫂〔カンジ〕

櫂には、弾力があり丈夫で狂いの少ないシウリザクラを使用しました。(写真125)



写真125

車櫂（くるまがい）は「櫂受けの軸」を通して使うもので、イタオマチブの特徴のひとつになっています。持ち手側寄りに「櫂受けの軸」を通す穴を開けます。(写真126)



写真126

長さ 2 m 86cmの櫂は先端にいくに従って徐々に薄くなっています。持ち手側は握りの部分以外を太くして重量のバランスをとっています。

「車櫂」は5対・10本作ります。(写真127)



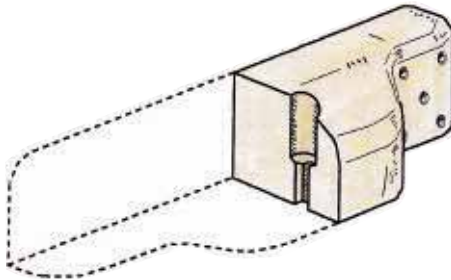
写真127

## 櫂受け

漕ぐときに大きな力のかかる「櫂受け」は、堅いドスナラで作ります。(写真128)

軸が回って抜けやすくなるのを防ぐため「櫂受けの軸」を差し入れる穴は上側を丸く、下側を四角く開けます。(図16)

右の写真は四角い穴を開けたところです。



櫂受け断面 図16



写真128

櫂受けを船べりの面に合わせて仮止めし、羽板も通して穴を開けます。これらの穴に細めの麻縄を通し固定します。(写真129、130)



外側より 写真129



内側より 写真130

「櫂受け」の位置は、座り板を取り付けた「あばら木」から、約70cmの所が「櫂受け」の穴の中心になります。左右対象に取り付けます。

車櫂を操作しやすい櫂受けの中心の位置は、漕ぎ手が座って膝から10cmほど先の所です。(写真131)



写真131

櫂受けに差し込む「櫂受け軸」を作ります。エリマキノキの樹皮を剥いて、片側の先を四角く削ります。櫂受け軸は消耗品なので、航海に出るときにはたくさん準備しておくものです。

この軸に車櫂の穴を通します。(写真132、133、図17)



写真132



写真133

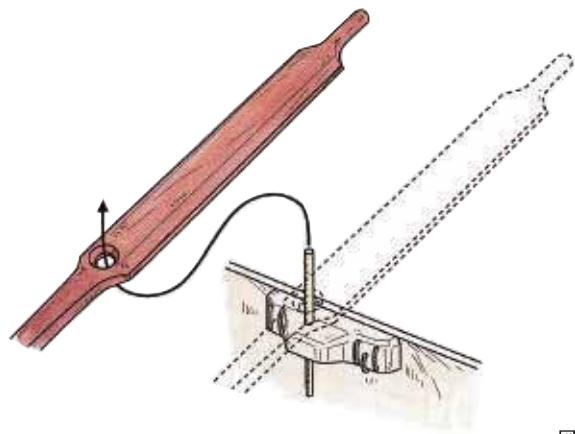


図17

## ねがいの 練り櫂

練り櫂の材料もシウリザクラです。車櫂よりも巾を広く作ります。(写真134)



写真134

持ち手側は細く、断面を四角にします。端をひらがなの「く」の字型に削ります。(写真135)



写真135

練り櫂は持ち手を別に作ります。持ち手には櫂の本体と組み合わせるための穴を開けます。両端は握りやすいように円筒形にしています。(写真136)



写真136

持ち手の反対側の面です。(写真137)

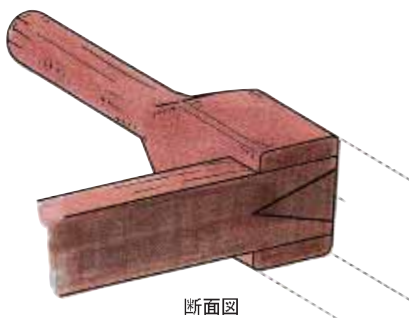
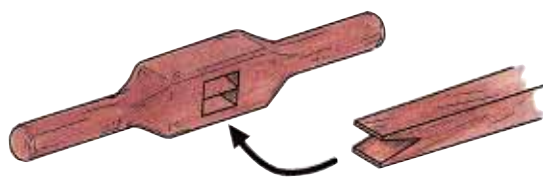


写真137

持ち手と本体を組み合わせ、細めの麻縄を叩きながらしっかりと詰めて巻きます。このように組み合わせると緩むこともなく、捻る力にも強くなります。(写真138、図18)



写真138



断面図

図18

練り櫂は船頭が使うもので1本作ります。漕いだり舵をとるための櫂です。

車櫂のように「櫂受けの軸」を通す穴は開けません。(写真139、140、141)



写真139



写真140



写真141

## 練り櫂用の櫂受け

船尾には、「練り櫂」用に縄で櫂受けを作ります。櫂受け用の当て木を固定します。船尾から見て左側に取り付けます。(写真142、143)



外側 写真142



内側 写真143

穴を開けて縄を通します。その縄の環に同じ縄を巻きつけ、太くして丈夫にします。(写真144)



写真144

練り権用権受けの取り付け方 (図19)

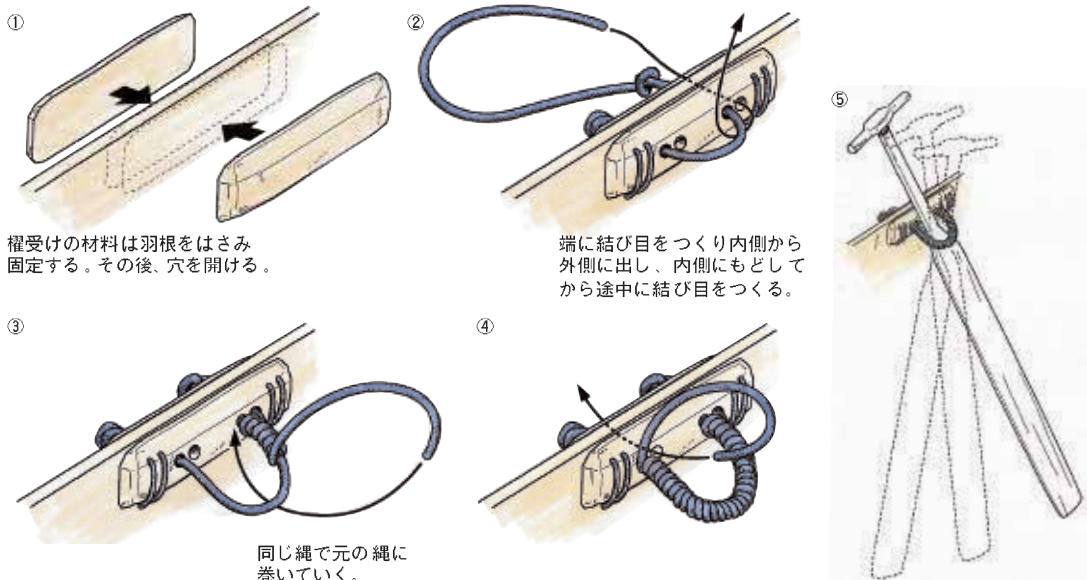


図19

巻きつけた縄は舟の内側に開けた穴に、通して結びます。(写真145)



写真145

練り権はこの環の中に通して使います。練り権が自由に動くように、環には余裕を持たせます。(写真146)



写真146

## 〈飾り板・飾り木鈴・帆〉

### 飾り板

舟の前後につける「飾り板」は、左右対称に一對ずつ作ります。(写真147)



写真147

センノキの板を加工し、色を付けて後彫りで文様をつけます。繰り返し波などを図案化したものが彫り込まれています。

かつてアイヌが航海の安全を願って描いていた文様といわれています。(写真148、写真149)



船首の飾り板 写真148



船尾の飾り板 写真149

## 飾り木鈴〔トウムシ〕

オンコで木の鈴を作ります。この飾りは、一本の木を削って鎖状にする木鈴です。写真は左から角材から削り出す手順です。(写真150)



写真150

この飾りにも、魔よけになる波の文様を彫ります。鎖状の飾りは合計4つ作ります。(写真151、152)



写真151



写真152

## 帆

舟作りは男の仕事ですが、ガマを編んで作るこの帆は女性の仕事です。

帆の下側に両端を輪にした縄を綿の紐で絡めます。上部には竹の棒を付けます。(写真153)



写真153

## 〈帆柱設置・飾り付け〉

### 帆柱設置

帆柱は中央付近に立てます。帆柱が入るように、座り板を四角く切り取ります。(写真154)



写真154

その真下の舟底に帆柱の台形にあわせて深さを約1 cm削ります。(写真155)



写真155

舟に固定する細めの縄を帆柱の穴に通します。縄は帆柱を中心にして左右同じ長さにします。帆柱に繋がる縄は全てそのようにします。

帆柱に直角に差し込んだ木に通す縄は船体の中央部で止めるためのものです。先端の穴には、船首と船尾に渡す縄を通します。(写真156)



写真156

舟底の切り込みに帆柱を合わせて立てます。(写真157)



写真157

帆柱がまっすぐ立つように縄を引き、船首、船尾の貫木の左右に縄を巻きつけます。余った縄は予備にするため、切らずに束ねます。(写真158、159)



船首側 写真158



船尾側 写真159

帆柱の立つ中央部は上から降ろしてきた縄を、羽板を綴った縄にまわしてくぐらせませす。その左右の縄を帆柱に寄せ、巻き付けて固定します。帆柱は縄を解くことで簡単に取り外しができるようになっています。(写真160、161)



写真160



写真161

## 飾り付け

船首、船尾に飾りつけをします。縄で留めました。船首側の飾り板の先端部に補強の棒を取り付けます。竹釘と縄で固定しました。

4本の鎖状の飾りを赤と黒の紐でとめます。これらの色を使うことで悪い神が寄りつかないと考えられています。  
(写真162、163)



写真162



写真163

船尾の飾り板です。(写真164)



写真164

## 帆をつける

帆柱から左右に降ろした2本の縄を帆の下部につけておいた輪に通します。引き上げるための縄を帆の上部に固定し、引き上げて帆を張ります。

帆には赤と黒の模様が織り込まれています。(写真165)



写真165

## 〈完成〉

全長13.5m、巾およそ1 m30cm、イタオマチブの完成です。練り櫂を持つ船頭役一人、車櫂の漕ぎ手5人が乗る大きな舟です。



写真166

このイタオマチブ再現のための制作期間はおよそ2カ月です。かつての舟造りでは冬に原木を伐採し、夏には進水していたといいます。



写真167



写真168

イタオマチブを造るのは、神々に祈り、土台となる丸木舟の木を求めることから始まります。良い木が手に入ると、その木を丹念にくりぬき、削り、穴を穿ち、根気よく縄で一目一目縫い合わせたのです。



写真169

イタオマチブからは、道具の限られていた時代にありながら、アイヌの造船技術がいかに優れていたかを伺い知ることができます。



写真170



写真171



写真172



写真173

神々への祈りから始まる舟づくりでは、最後に「舟おろしの儀式」を行います。

神々に、舟を造ったことを報告し、また無事に作業を終えたことへのお礼も伝えます。(写真174)



写真174

大きくて良い舟には、妬ましく思う悪い神々がつくとわれ、笹の葉をつけた棒で悪い神々を追い払います。(写真175)



写真175

最後に舟おろしの儀式が滞りなく終わったことへの感謝の祈りを捧げてから、進水します。(写真176)



写真176

舟を出して最初にする事は左右に揺らしてみることです。舟の左右のバランスをみることと、船乗りが舟に慣れるためです。

アイヌの板綴り舟・イタオマチブは、船頭以外、進む方向に背を向けて座ります。そして、くるま權を左右交互に漕ぐのが特徴です。(写真177)



写真177



写真178



写真179



写真180



写真181



写真182



アイヌは優れた舟造りの技術をもっていました。アイヌの独特の技術によって生まれたのが「板綴り舟・イタオマチプ」です。舟を使って川や海を移動し、漁撈、採集や交易をして生活していたアイヌ。舟が生活必需品であったからこそイタオマチプにはアイヌの知恵と知識が注ぎ込まれたのです。

江戸時代まで使われていたというイタオマチプ。かつてアイヌが国境のない海を、自由に航海し漁や交易をしていた時代には、帆にたっぷりの風を受けて颯爽と進む「イタオマチプ」の姿が見られたに違いありません。

## 参 考 文 献

イタオマチヅの製作にあたって、参考となる文献をいくつか紹介します。

- アイヌ無形文化伝承保存会  
1991：『アイヌ文化 第16号』アイヌ無形文化伝承保存会
- 犬養哲夫  
1936：「アイヌの木皮舟（ヤラチップ）」『北方文化研究報告』1 北海道大学
- 大塚和義  
1995：『アイヌ 海浜と水辺の民』新宿書房
- 堀江敏夫  
1971：「アイヌの板綴舟～文献を中心とした～」『郷土の研究』3 苫小牧郷土文化研究会
- 北海道立北方民族博物館編  
1995：『北方民族の船 北の海を進め』北方文化振興協会
- 由良 勇編  
1995：『北海道の丸木舟』マルヨン印刷株式会社
- ケー・アンド・エス  
1995：『アイヌ民族写真・絵画集成 第2巻 アイヌ民族の民具 生き続ける伝統』日本図書センター
- 熊崎農夫博・三野紀雄  
1997：「厚岸町における丸木舟について」『北海道開拓記念館研究紀要』25 北海道開拓記念館
- 村上貞助  
1822：『蝦夷嶋図説』市立函館図書館  
1823：『蝦夷生計図説』  
(河野本道・谷澤尚一解説 1990：『蝦夷生計図説』北海道出版企画センター 復刻)

### イタオマチヅを展示・収蔵している施設

イタオマチヅもしくはイタオマチヅの模型を展示、あるいは収蔵している施設をいくつか紹介します。

#### 北海道内

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| ●財団法人アイヌ民族博物館 | 白老町若草町2-3-4     |
| ●釧路市立博物館      | 釧路市春湖台1-7       |
| ●苫小牧市博物館      | 苫小牧市末広町3-9-7    |
| ●北海道開拓記念館     | 札幌市厚別区厚別町小野幌    |
| ●北海道立北方民族博物館  | 網走市字塩見313-1     |
| ●帯広百年記念館      | 帯広市緑ヶ丘2番地       |
| ●門別町図書館・郷土資料館 | 沙流郡門別町豊川東1丁目3-1 |
| ●厚岸町海事記念館     | 厚岸郡厚岸町字港町50番地1  |

#### 北海道外

- |              |               |
|--------------|---------------|
| ●国立民族学博物館    | 吹田市千里万博公園10-1 |
| ●みちのく北方漁船博物館 | 青森市沖館2丁目2-1   |

アイヌ生活文化再現マニュアル  
綴る  
イタオマチブ  
【板綴り舟】

---

2002年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

